

資料

賀川豊彦による「中国」の報告／類比(1)

——1915年～1925年——

金丸裕一

はしがき

この資料は、1915年から1925年にかけて発表された賀川豊彦による作品の中から、「中国」に言及した内容を抽出したものである。周知の通り、1917年5月に米国留学から帰国した賀川は、古巣の神戸において従前からの救貧活動に精励するとともに、労働運動や農民運動などでも指導的な役割を任じるようになる。社会的福音の実現を目指すキリスト教伝道者としての出発点から、より幅広い領域へと越境を開始した段階でもあった。

彼の活動は、単にキリスト教界のみならず仏教界からも注目を集め、『中外日報』という日刊紙に主筆以上のペースで署名記事を連載したのも、この時期の出来事である¹⁾。また、1920年秋に刊行された『死線を越えて』は大正期最大のベストセラーとなり、有島武郎や島崎藤村・倉田百三といった職業作家、また西田天香や伊藤証信らの宗教家とともに、時代思潮を牽引する役割をも担ったのであった。

その賀川は、1920年夏に初めての中国を体験した。米国から帰朝後第一回目の外遊先であり、彼の作品中における中国への言及は、これを機に急増する²⁾。そして、1920年代民国における様々な「新潮流」に対して賀川が与えた影響力も強烈だった。満洲事変後の「変調」問題を含めて、日中関係史上シンボリックな市井における「他者像」をめぐる言表であったといってもよからう³⁾。

無論、彼は地域研究の専門家ではなく、かつ牧師を立脚点とした人物であるため、「中国」について表現する手法や発表の場も、極めて多様だった。既に没後60年以上の歳月が過ぎ去り、従前から知られた賀川豊彦記念松沢資料館（東京）や賀川記念館（神戸）の他にも、国立国会図書館デジタルライブラリー、あるいは「賀川豊彦オンライン資料集」を通じたテキスト公開など研究基礎整備が進むなか、様々な角度から賀川豊彦への学術的知見が深まることも期待されている。手作業で進めたこの仕事には、誤記や見落としなど足らざる部分も残るだろう。また、抜粋箇所
の妥当性についても、第三者による検証を要するものと自覚している。これらについて、利用者各位からのご批判とご助言をお願い申し上げたい。

凡 例

1. 刊行年月日の古いものから配列した。
2. 原則的に刊行物の奥付を採用したが、講演記録など初出日時が判明するものについては、それに従った。
3. 漢字の正体字は、大半を常用漢字に改めた。変体かなについて置換を行った場合は、括弧 [] によって示した。
4. 原文中で句読点が欠落していると判断される部分については、括弧 [] 内にそれを記入した。
5. 時系列性を明示するため、各資料の前には便宜的に整理番号を附した。
6. 出典については、各資料の末尾に明示した。

資料本文

【1915年】

1915-1. 「第五章 貧民発生史」

支那では貧民問題は早くより多くの知者の頭を悩ましてゐた。仙人道は一面貧民道である。彼等は自己の生活程度を支那の貧民レベルまで下げて一種の精神生活を説いたのである。彼等の絵姿を見ると当時の貧民の代表的面影がわかる。鐵拐君は老子の友人であつたが乞丐となつて生存したと云ふ。彭祖は浮浪生活を送つて五十四人の妻を代へたと云ふ。沈義も、負局先生も朱璜も阮丘も皆貧民を憐れみ医術を施して仙人になつたと云ふ。そして此仙人が貧民の問題と密接の関係があると云ふ傾向は漢になつて一層明白になつた。即ち仙人の発生史は貧民の発生と密接の関係が有つたのだ。

（賀川豊彦『貧民心理の研究』警醒社、1915年11月25日、61頁）

1915-2. 「第七章 日本に於ける貧民及貧民窟」

穢多には一種特別の人種があることは確かである。……然し、穢多は混合種であることは拒むきとは出来ぬ。或者には支那人の骨相があり或者には日本人の骨相があり或者には白哲種の形がある。その系統を研究すれば必ず得る処があるに違ひないのである。

（賀川豊彦『貧民心理の研究』警醒社、1915年11月25日、98～99頁）

1915-3. 「第八章 貧民窟の人格の研究（其一）」

然し世界で一番づうづうしい乞食は支那乞食であらう。一昨年読売新聞にこんな事が出てゐた。乞食の歡樂境—北京乞食団は総員十万人に達して居る。其大総統は普通選挙で選定する其任期は一ヶ年で、毎年清朝時代に天子の通行の際にのみ開かれた門の側で会議を開くのである。世で

はその門側にある橋を乞食橋と呼んで居るが勿体ない様な橋である。

尚乞食団の制度を詳細に聞くに北京城内外を数十箇の小区画に分ち団員がそこに配当され区内の各商店や民衆から、来訪する度毎に普通壹錢乃至貳錢を租税の如く取りたてることになつて居る。そしてもう此税金即贈与金を拒絶するものがあれば、数十名の乞食が示威運動を行ふのである。さくて渋々ながらも支払ふのである。こんな場合警察に訴へても警察はたゞ『与へよ退却するから』と云ふのみである。それで或富豪の如きは一年一回定つたる金額を乞食団に贈与するさうである。すると乞食大総統、黄色の免役札をその家の門口に貼り出す。もし免役札があるを知つて猶其家を煩すものがあれば乞食政府の制裁を受けるのである。又春秋二回『乞食デー』と云ふやうな者が^{ママ}挙行され、此日は北京城内の各戸は皆門前に掬飯を提供して飽食せしめるさうである。北京では乞食を特別に優待して空家廢屋を貸与し「キ、マオファン」と云ふ寄宿舎も作つてあるさうだ。

(賀川豊彦『貧民心理の研究』警醒社、1915年11月25日、509～510頁)

【1920年】

1920-1. 「支那より帰つて」

支那から帰つて私は悲しい気になつて居ります。日本も資本家にのみ国をまかせておけば支那のやうになります [。] 支那では極々の貧民と政治家と結託した掠奪者が勝手気儘に人民を誅求して居ります。どちらを見ても民に青色はありません。

私は上海の貧民窟と労働者状態を六日間観察いたしました。それから揚子江を遡つて南京、漢口、北京、天津の貧民窟を見て廻りました。支那は漢や唐の時代から少しも進歩して居らぬことを私は強く感じさ、れました。私はそれからそれへと感じまして階級争闘も内乱も、民族戦争も要する処、成長を意味し教育を意味し無い時には民族の退化を誘ふものであると云ふことを固く感じさ、れました。

支那では人間は穀類より安いのです。人間の子が三弗から八弗の相場で売買されて居ります [。]

私は日本が嫌がられる理由を発見いたしました。孫逸仙氏に会ふとこんなことを云ふて居りました。日本は朝鮮の為めにと云ふて支那と戦ひ、支那の為めと云ふてロシヤと戦つたが、それは口実で今日は掠奪者となつて居る。日本が略奪者となつて以来もう日本に対する尊敬の心は無くなつたと。

私は日本が救済者の地位より略奪者の地位に變つたことを悲しく思ひます。

支那の飢饉を見ました。とても言語に絶して居ります。今年中に直隸省だけでも、三百萬人位は死ぬであらうと云はれて居ります。

支那では餓死するより生きることが望ましいと思ふ可憐な労働者が生活の為に身売りのようにして工場や農園に買はれて行き、幼年工は一日九仙で十一時間の労働をして居ります。

私は支那の社会主義者陳独秀氏に会ひました。此人は西南大学の総長になられる方です [。] マルクス学派です。北京では北京大学の総長の蔡元培氏に会ひました。また元気の善い私と全く意気相投じた胡適氏にも二度会ひました。同氏は哲学史家で社会主義者です。然し理想主義的で階級争闘を否定する点に於て私の意見と合致しました。

私は元気です。またぼつゝ考へ乍ら仕事に取りかゝりまじやう。（賀川豊彦）

（『労働者新聞』1920年9月17日，3面）

1920-2. 「貧民窟より—編者宛」

未見につき空欄とする。

（『上海青年』第22号，1920年9月25日，50頁）

1920-3. 「北京の冥想の朝」

(一)

甘き黙想の中に、私の心は目醒めた—北京の秋の朝、半鐘の澄める音を聞きて。

たかぶる私の神経は、甘きとりとめもなき冥想に支那の文化をパノラマの如く画き出す。

澄める心には、昨夜会ふた美しき若き哲学者胡適と、北京ホテルの舞踏と、「三四百万の農民が、今年飢餓にて死ぬであらう」と、クラーク夫人が云ふたその一言業と私の見た幾十万の貧民とその目もあてられぬ惨状が、たゞとりとめも無く、私の冥想の中を横ぎる。

昨日、私は北京の天壇に立つてかう祈つた。

「みひかりの主よ、御恵のぬし、支那を恵み光をもて、暗きを照らし、垂細垂の闇を払ひ給へ [。] 主よ、国は国を攻め、民は民を信ぜずとも願はくば、愛と十字架の精神に生かせ給へ。民は相信じ、掠奪の誘ひより逃れ、平和の日に清くいそしまし給へ。主よ。労働者の友よ。神よ。紫の瓦の下、紅の壁と乳を溶かせる大理石の天壇に立ちて—今は祈ることもなく捨てられたる石の塊の上に私はかく祈る。アーメン」と。

北京の天壇は、凡てを越 [え] て私には一つの啓示であつた。私は知らない—支那の歴朝の天子がどう祈つたか。私は知らない—袁世凱が、此处で、どう云つて祈つたか。

然し共和の後、長く捨てられたこの天壇にシャワード、エヂーが幾千かの北京の学生に基督教の説教を聴かせたことをも思ひ出す。然しその後、祈る可く作られたこの広い大きな祈りの祭壇は、また長く捨てられて居る。その道には草が蓬々と生 [え] 繁り、露に塗れずしてそこに通ふことさへ不可能なことゝなつた。

それで私は、この大きな天壇—偶像も画像もなき青天井の上に畳み上げられた天に礼拝すべき聖き祭壇に思ふまゝに祈つた。太陽は輝いて居た。青空は地に近づいて見 [え] た。森は緑に繁つて居た。人としては私等の友人二人の外は誰れも居なかつた。そして北京の内城には遠く離れて、人の声も馬車の響きも聞 [え] なかつた。市内にあるとは、云へ全く荒野の中に捨てられたような、この祈り経聖所には、祈る人もなく捨てられてあるのだ。

—そうだ。北京では祈る人は姿を隠したのだ。私は北京を廻つて、何処にも祈れる人を姿を見なかつた。

北の喇嘛教堂に祈れる人々のあることを聞いた。然しそこを訪れて、私は亡び行く、生殖器礼拝の露骨なる表白を見たにしか過ぎなかつた。その偶像の多くは歡喜仏と呼ばれて居た。それは印度神のカリーが処女と交接した姿であつた。そんな形のものが幾十体となく陳列せられてあつた。私は別に悪い気も起こさなかつた。それは小乗仏教から遠く離れた生命の肯定とも見られるもの、また醜悪なる動物性の曝露の悲哀に畏縮すべきことを教 [え] る苦痛礼拝とも見 [え] た。

然し私は、礼拝の心よりか、畏縮の心を以つて喇嘛宮を出た。

(『中外日報』1920年9月25日、1面)

(二)

私は萬壽山に出た。私は孔子廟を訪れた。然し凡ての信仰は冷 [え] て居た。孔子廟で私は「大同」の大額が目についた。忠孝の教は共和の支那には合はないために、北京の哲人等は煩悶して、孔子を新しい型に鑄換へたのが、その大同哲学である。そのために支那では今日孟子程馬鹿にせらる哲人はないのである。北京大学は哲学の書き換へに急がしかつた。康有為や梁啓超の大同哲学も今は信用がなくなつた。それは孔子は「民主」を説いたと教へた。その哲人等が、民主に裏切つて共和の支那を袁世凱に売渡したからであつた。大同の哲学はそれを説明すべき実行によつて裏切られた。そして孔子廟と孔子の教堂はまた永遠に捨てられた。支那を謬らしめたのは孔子の教であつたと北京大学の教授等が説き初めた。

私はそれ等の哲学的勇士に会つた。一人は上海で、二人は北京で [。] 上海で元北京大学文科学長の陳独秀はマルクス社会主義者として私を訪ねて来てくれた。彼は孔子を北京大学から追い払つた急先鋒であつた。そしてそれを手伝つた人に北京大学総長蔡元培と若き今年二十九の哲学者胡適とが居た。彼等は孔子より墨子を偉人だとした。たゞ歴代の王朝は自己を守るために孔子の哲学を守護したにしか過ぎないが、墨子こそ人間性に透徹せる哲人として彼等は北京大学に墨子を迎え入れたのであつた。

それで、支那唯一の国立大学の北京大学では二千年来の哲人の地位を奪つて、今はその地位を墨子に与へた。

見よ！ 孔子教堂の荒れたることよ！

遂に私は祈れる人の姿を何処にも発見せずして北京を去らねばならないかと嘆いた。それで私は耶穌教堂を訪れた。北京で最も盛んなのは淮文大学の教会と、公理教会とであつた。然し私はその会衆に混つて祈ることが出来たか—否、私はたゞそれが借り物の外套としての宗教の中に坐つて居るような気がした。それで私はそこを逃げるようにして出て来た。

たゞ私をして感激せしめたのは救世軍の朝の礼拝であつた。私は支那家屋の小さい講堂の中に喇叭とオルガンと太鼓と拍手の鳴ることを奇妙な調和だと考へた。然し歌はれる歌の凡て私は知つて居た。それは北京の貧民の口より出るものであつた。その会衆はハイカラの淮文大学の学生と違つてゐた。公理教会のハイカラな娘たちと違つてゐた。みな浅黄服の職工学校の生徒達であつた。浅黄色の支那！ 支那の苦力はたゞ一枚の浅黄の上衣しか持たぬ。その神聖な色の中に坐り、その激越な調子の中ながら私は、云ひ知れぬ労働者の福音の勝利を見た。そして私は北京の亡び行く有様と興らんとする支那の苦力宗教の運命に就て考へて見た。救世軍はそれが常に教育の方面に於て失敗して居るために世界的再建の根本勢力となり得ないが、何処に到るも貧民と弱者と平民の友たることに於て私は感謝する。私は急いだ旅に一時間余も自動車を待たせてその小隊の中で祈つた。音楽は続けられた。私の眼から流れる涙が止まらなかつた。支那を救はねばならぬ。支那を！ 然し支那を救ふものは多くの借款を貸すものではなくして、苦力階級を救ひ得るものだと考へ乍ら、私は祈りつゞけた。

(『中外日報』1920年9月26日、1面)

(三)

私は小隊の門を出てまた考へて見た。一体支那の宗教は何であらうと。私はお盆に多くのお祭りをした。上海で、南京で、漢口で、北京で。彼等の中にはかすかに仏教と道教の混同した宗教が残つて居る。私は到る処で道教の僧侶の動きつゝあるを見た。然し私は道教の中に新しい生命の芽が吹いて居ると云ふことを聞か無かつた。支那の民衆は今日は孔子に従つて居りはしない。勿論仏教に追いつて居りはしない。それは功利的な道教について行つて居るのである。内容も無く、成長も無く、形而上的思索も無く、凡てが宿命の中に「福、福、福」の文字を門口に並べて、その後に追いつて居るのだ。

絶 [え] 難き虐政に彼等は民族としての行く可き方向を全く見失つたのだ。仏教も彼等を救はず、儒教も彼等を救はず、功利宗教の道教が彼等を救ひ上げた。

北京の城壁が高く長く廻る。そして城壁の中に、また城壁があつて宮城が守られて居る。然しそのまた内部城壁の中に城壁があり、その城壁の中の城壁の中は、また城壁が設けられて居る。個人の住宅は凡て一個の城壁である。三間も五間もあらうと思はれる壁がその家を他人の家から切り離し、その内部が、また多くの壁で区切られて居る。つまり北京は平面に拡がった穴居の文明である。

勿論あれで商売の出来よう筈が無い。それで多くの商売は今日猶露天に持ち出して縁日市の如く無産者の為めには「天橋」附近の天幕の下で行はれて居る。

私は北京で、墓場の中に送られたような気がした。城門外には飢民と貧民が群つて居た。北京飯店（それが Peicing fountain と響く）では、毎夜の如く仏蘭西人のオ・ケストラに合せて舞踏会がある。私はペキンリーダーの主筆に案内せられて夜の十一時と云ふにそこの六階に登つた時に、若き白人等の八組か九組の舞踏者が有つた。美しく無いこともなかつた。然し私にはそれが夢で無いかとも思はれた。穴蔵のような北京と、幾百万人が飢 [え] 死にすると聞かされて居る北京の真ん中で、如斯く夜を徹して踊るものがあると思へば、私はそれが「死の舞踏」で無くてなんであらうと思ふた。

（『中外日報』1920年9月28日、1面）

(四)

北京の城壁は固く睡つて居た。そして目醒めたものは、たゞ死の上に踊るものゝみで有つた。踊るものは踊れ、如斯く世界は奈落の底に落ちるのでは無いかと私は考へたのである。

私が北京の貧民窟を尋ねんが為めに北の城門を自動車で出ると、私の自動車は座席の下まで調べられる。萬壽山へ自動車で出ると、衛兵の一分隊が私の自動車を隈なく調べる。（ペキンには電車が無いのと馬車は人力車より遅いのでどうしても早く北京を見ようと思へば自動車を使用せねばならぬ）私はなぜ自分の自動車がそんなに詳細に調べられるかの理由を知つて居た。それは徐樹瑄の一派が自動車の座席の中に潜められて日本公使館に先日運ばれたからであつた。

北京へ来ると全く戒嚴令の下に居るような心持ちがした。北京は学徒の住む処では無いと私には考へられた。私には北京が実に暗く見 [え] た。「北京は呑気な処だから燕毒（燕京の中毒のこと）にかゝる」と上海で教へられたが、私には北京で窒息するように考へられた。

北京は固く睡つてゐる。半鐘がなつても睡つて居る。革命が有つても睡つて居る。そしてこの後何度半鐘がなつてももう起きまい。支那の中心はもう北京には無い。それは疾に上海に移つて

居る。

北京は掠奪者の集合してその掠奪品の分配に預る所である。それで城壁の中に城壁があるのである [。] その古き都が、新しき愛と互助の天啓に眼醒めても、まだ城壁を着て居る中は何にも役に立たない。

北京が一支那がああ長いそして大きな家々の城壁と都市の城壁を脱ぎ捨てる時に北京は再び産れるのだ—

こんなことを考へると、私は北京の凡ての風物がいやになつた。それで私はそれを出来るだけ早く捨てることに決心した—

北京の秋の朝の冥想はまつたく暗かつた。(完)

(『中外日報』1920年9月29日、1面)

1920-4. 「二十」

……世界に新聞計り読んで一生を送る人は多い。なに新聞計り読んで居ては飯が食べぬ……然し一寸新聞を読まう。『一寸新聞を読みます』と頼む様に自分に云つて見て寝巻きのまゝ、玄関へ急いで飛んで行つた [。] 踞んだまゝ、新聞を読み始めた。

論説には何だか中華民国の危機とか云ふもの……ア、老子莊子の国が危ないと云ふものか？……亡びようが亡びまいが、我輩にはちつとも関係はねえ。……亡びても我輩さへ生きて居りさへすればそれで善い。敵がせめて来て僕を殺しても僕の幽霊は残る。幽霊が残つたらそれで善い。中華民国の危機とか云ふのは世界に威張りたい連中が捏造した遊び事だ [。] まゝ我輩には関係はねえと一頁を瞥見して二頁を返したが……。

(賀川豊彦『死線を越えて』改造社、1920年10月3日、238～239頁)

1920-5. 「支那の新人胡適氏」

胡適氏は北京大学の哲学教授であつて支那の改造運動の第一人者である [。] 同氏は哲学としては墨子を取り社会主義者であるが階級闘争を否定して居る [。]

(賀川豊彦「階級闘争と労働組合」、『労働者新聞』1920年10月15日、

1面に掲載された胡適の肖像写真に添えたキャプション)

1920-6. 「序」

わたしの魂よ、神戸に貧民窟が無くなつたなら大阪に移れ！ 日本に貧民窟が無かつたなら支那に移れ！ おまへの魂は一生貧民窟に縛りつけられて居るのだ。

(賀川豊彦『地殻を破つて』福永書店、1920年12月6日、序8頁)

1920-7. 「神の日本」

神の日本、人類の日本は、之で果してその職責を尽くして居るのか？ 故に私は愛と正義の使徒として、この国民に叫ぼう。「日本は神と人類に属するものである。平和とデモクラシーはその本領であれねばならぬ」と。

日本は何時までその進路に迷ふのか？ 太平洋は広くてもその航路は一定して居る。行く可き

道は多くても日本の進路は定まつて居る。それはシベリアへでもない、南へでも無い、勿論支那へでも無い、神へだ！ 神へだ！

日本は神の国を占領すべきだ！ 誠に、その日に世界は日本に属する。そして神も日本に属するのだ。その日に西の国々は勿論のこと、万民が日本のために感謝するのだ。然し日本は今それを知ら無い。

神よ、汝と人類の名の為に、日本が目醒る日は何時ですか？

（賀川豊彦『地殻を破つて』福永書店、1920年12月6日、96頁）

1920-8. 「一羽の雀」

三等室の客は皆大きな声で笑つた。今朝二番の荷倉で支那人が死んで居たのが見付かつたとボーイが報告したからである。その報告せられた話はざつと次の様なものである。

横浜を出て五日目に一人の支那人の火夫がコレア丸から消失したのである。それで火夫仲間では身投げでもしたものであらうと評判して居た。そして誰一人彼の為に悲しむものとなかつた。米粒一つが地上に落ちた位にしか考へられなかつた。勿論三等室の誰れもそのことに就て聞かなかつた。然し船が布哇のホノル、に着いて二番の荷倉が開かれて見ると、横浜を出て五日目に消えた支那人劉峰生の死体が出て来たのであつた。彼は荷倉の中に陥ちて其儘捨て、置かれたので死んでしまつて居たが。船長も運転士も別に船中を搜索することもしなかつた。支那人の火夫一匹位月給は僅か四弗か五弗で、いくらでも雇へるのだから人間の仲間だとも考へなかつたものと見える。実際人口四億もある支那の国では、人間の生命はそう高価なものではなく、支那の沿岸の開港場では、月、メキシコ銀一弗か二弗で、大洋通ひの大汽船の火夫は何千人でも雇ひ入れることが出来るのである。で、今日大西洋の凡ての汽船の火夫は凡ての凡てが支那人であると云ふても善い。……劉は上海から今度初めて乗込んだ者でまだ海上労働には少しも経験がなかつた。家には養母とその養母の祖母がまだ上海の貧民窟に残つて居るそうである。劉はまだ二十三だと云ふが、面長の青い顔をした中脊の男であつた。彼は船に乗るまではジャンク船の苦力をして居たが、激烈な労働に堪へないものだから火夫にでもなつたならと思ふてか、組頭に直接頼み込んで雇ふて貰ふたのだが、そうも健康でないために機関室の用事が思つた程に出来なかつた。それで火夫連中は邪魔者の様に彼を扱ふて居た。……

私はその時に三等客として荷倉の側に立つて居た。そして火夫の死体の取扱いに憤慨して見たが、一羽の雀でも神は見過しにしないと云ふに、この人間の生命は何故如斯見過ごしにせられるかと考へて目を湿ませざるを得なかつた。

（賀川豊彦『地殻を破つて』福永書店、1920年12月6日、411～419頁）

【1921年】

1921-1. 「第三章 イエスの祈禱の心理」

私は昨年（大正九年）の九月頃、天津の領事と共に、天津の貧民窟を見に行つた。そこへ直隸省辺からの飢民が雲集してゐるのを見て領事に忠告した事であつた。私は其処で四千人の人が飢えて、住むに家なく、野宿をして苔を食つてゐるのを見たのであつた。

（賀川豊彦『イエスの宗教とその真理』警醒社、1921年12月17日、126頁）

1921-2. 「第四章 イエスの死と其前後」

支那は此頃改造時代で、色々の新思想が盛に称へられてゐるが、北京大学の胡適と云ふ哲学者は、「中国哲学史」を書いて、孔子はつまらぬが然し、墨子は偉い。彼の兼愛説は尤共和政治に適合する所の思想だと云つて、墨子を頗りに推讃してゐる。トルストイと墨子の兼愛説とは其愛の徹底を説く点に於て非常に似てゐるが、然し乍ら、これだけでは足らぬ。トルストイ及び墨子から更に奥にはいつたのがイエス・キリストであつた。彼は愛を説くのみでなくそれを実行で表はされた。

(賀川豊彦『イエスの宗教とその真理』警醒社、1921年12月17日、204頁)

1921-3. 「第五章 イエスと弟子との関係」

ビリイ・サンデイは、二十三万人の改心者をつくつたと云ふ。誠に善い。が然し真の教養は改心して後からである。それは一人一人行かねばならぬ。ハドソン・テラーは支那で五十年間伝道して、たつた一人の信者をつくつた。彼は宣教師としては失敗者であつた？ 然し今日上海へ行けば支那内地伝道会社と云ふ一団体が盛に活動してゐるのを見るが、此会社の基礎を置いた者こそ余人ならぬハドソン・テラー其人である。彼は五十年間に一人を信者にする事に依つて今日の支那百万の新教徒の基を据えたのであつた。今日の所謂学校教育では到底、真の人格教育は覚束ない。

(賀川豊彦『イエスの宗教とその真理』警醒社、1921年12月17日、246頁)

【1922年】

1922-1. 「揚子江の屍」

揚子江に／屍が流れて行く／裸体のまゝ／腐りはてゝ／さびがついてゐる。／水の流れるまゝに早く／川下に流れて行く／屍の側に 帆船が／走つて居たが／屍を拾ひ上げようともせず／走り去つた。

『夏は／毎航海 二つか 三つかの／屍に遭ひます』と／二等運転手が／私に教へてくれた。

屍は 下に 下に／流れて行く／広い毒々しい／黄ろい急流は／静かに流れてゐた／妖怪のやうに――

(賀川豊彦・加藤一夫・白鳥省吾・富田碎花・百田宗治・福田正夫

『日本社会詩人詩集』日本評論社、1922年1月7日、3～5頁)

1922-2. 「河南の平原」

水の涸れた平原に／砂烟が立つ／何百里か、／何千里か／ただ 茫漠たる平原を／一寸のすきだにゆるがせにせず／根気よく 耕した／その労力の貴しさ――安すさ！

野驢馬が走る／羊牧者が佇む／汽車に群がる／放浪者――乞食――

苦力の大群が／無蓋車に乗せられて／大平原の淋しい／停車場に捨てられてある。

黍は一尺しかのびず／稗は五寸しかのびないで／人間の努力に裏切る／今年の飢饉——？

土塀は崩れ／城壁は破れ／山も 河も 凡て／疲れてゐる。

黄なく光る／黄河の顔——／すぐ思ひ出す 支那人の／黄ろい顔——

そして／黄ろい／太陽が／黄ない埃の立つ／河南の平原を射る。

汽車は駅口に止つて／無闇に客車を／占領したがる兵士の群の／灰色の姿が／睡むさうに蠢めいて居る。／夏の終りの／午後の日——

『まだもう一ぺん／内乱があるのかなあ？』

汽車は烟を立て、／河南の平原を走る——／謎のやうに。／幻のやうに。

（賀川豊彦・加藤一夫・白鳥省吾・富田碎花・百田宗治・福田正夫

『日本社会詩人詩集』日本評論社，1922年1月7日，6～10頁）

1922-3. 「第二章 預言者の社会学」

オクスフォード大学のセイス（バビロン学者）の研究「アツシリア人とバビロニア人」に依ると、其頃、男は十五円位、女は六円位借金すれば奴隷に行かねばならなかつたのである。私が大正十年に支那へ行つた時に、北京の真中で、子供一人を十円位で売買してゐた。只今では、二円位で売られてゐるさうである。大正九年末に三百万人からが、飢死するかも知れぬと云ふ事であつた。これから考へると鞋の代価で子供を売買したと云ふ、アモスの言葉は事実であると思はれる。

（賀川豊彦『聖書社会学』日曜世界社，1922年3月10日，117頁）

1922-4. 「泣き味噌哲人と笑上戸哲人—ヘラクリタスとデモクリタス—」

胡適氏と私の問答

この間私が北京で支那の哲学者胡適氏と会つた時に、胡適氏は『君と僕との違ふ所は、君は神を信じ、僕は神を信ぜざる所にあり』と云ふた。そこで、私は尋ねた。

『神とは一体何だ？ 超越的な、自然の彼岸に隠れた法則のようなものか？ そんなものを己れは信じて居るのでは無い。己れの信じて居るのは『生命』を信じて居るのだ。『生命』は己れを超越してまた己れに内在して居る。己れは、生れたいと思つて生れたのでは無いが、己れは生れさゝれた。『生命』は己れの中に、考へ、泣き、笑ひ、ものを云ふ。生命は人格であり、また人格を超越して居るらしくも見える。己れの神と云ふのは、直観の世界に覗き込むこの生命の外に、何もかも無いのだ。己の云ふ、絶対とは生命と云ふことだ』と云ふと、胡適氏は、そうか、それに就ては、己も考へ直して見やうと云ふた。

…… (一九二〇・一・〇)

(賀川豊彦『星より星への通路』改造社, 1922年5月25日, 195頁)

1922-5. 「無産生活の享楽」

支那に来て

支那に来て、私は貧民窟を尋ねて、路次を彷徨つた。上海に、南京に、私は幾十万の貧民を見た [。] 湖北の飢民は江蘇の都市の貧民窟を形造り、その惨状は言語に絶して居る。然し、私は何処でも、貧民の愛らしく、柔和で有つて、少しも私が遠ざけられないことを発見した。子供等は、すぐ、私等になづいてくる。私はその頸を抱いてすぐ友人になる。裸体の彼等には、何の遠慮も無く、私の抱くまゝに寄り添ふてくる。

私は友人に云ふた。私がもし、支那に住まなければならないならば、日本と同じやうに、上海の貧民窟に住むと。

私が貧民窟に住むのは、犠牲の爲めでは無い。私は、貧民生活を享楽して居る。私に貧民生活をよせと云つても、よせられ無い多くの理由がある。私は持つことが嫌ひである。私は指環や宝物に少しも趣味が無い。勿論衣類や、靴や、蒲団に就て少しも好みがない、私は凡てが簡易でありたいと考へる為めに、複雑な生活が嫌ひである。

私は人に使はれるのが嫌ひであると共に、人を使ふのも嫌ひである。西洋料理が食ひたい為めに料理人と、給仕人とを別に使用せねばならぬ複雑な生活は、私に合は無い。

私は二重の生活がしたくない。私は私の主人公でありたい。それで面倒臭い五重六重の形式生活に飽いて居る。

つまり、私は無産者生活を居心地の善い生活法として、享楽して居る。

……

私は多く持つて居る為めに高い塀をたてて、常に裏切せんとする下女下男に取り囲まれて、閉門生活を送る貴人を憐む。私は無産者であるために——又貧乏である為めに万人を友人となし得るうれしさを感じせざるを得無い。多くを売らんとする商人には排日ボイコットがあるかも知れ無い。然し愛せんとする意志のある私には、どんな無頼漢の住む支那の貧民窟でも。私は安全である。私は無産者を誇る。多くを持つことは多くの場合墮落して居るのである。間違へてくれては困る。私は多くを創造することに反対するものではない。労働者は常に生産して居る。然し彼は常に聖貧に甘じて居る。それで彼等は常に勤勉である。多く創造せざるものは、常に多く持ちたがる。それは墮落した一種の本能である。…… (揚子江を眺め乍ら)

(賀川豊彦『星より星への通路』改造社, 1922年5月25日, 235~236頁, 及び243頁)

1922-6. 「イエスと女性の尊敬—イエスと女性の聖化 (承前)」

両性の危険性……若し我々が充分警戒をしてゐないと両性観と云ふものは、往々にして混乱する恐れがあるものである。聖哲孔子は妾を有つてゐた。儒教では、正妻と共に副妻を認めるのである。支那では、今日でも、四人までは妻を有つ社会風習が行はれてゐる。現にかの孫逸仙ですら、妙な噂を立てられたのである。で先づ両性観がはつきりしてゐないと、我々の生活と云ふものは、何時とはなしに墮落する傾向を有つものである。

（『雲の柱』第1巻第6号，1922年6月1日，44頁）

1922-7. 「友宗教運動と友社会運動」

支那の青年学者と社会主義者の一派が、反宗教運動を始めたのに就て、兎角の批評があるが之は決して笑ふ可きものではない。宗教信者の間に反社会運動の人々がある以上、社会運動をする人々の間に、反宗教的に出るのは決して不思議ではない。

然らば何故、社会運動をするものが宗教運動に反対するかと云へば、それには色々の理由があらう。

- 一、現代の宗教が腐敗して居ること。
- 二、文明が機械化して居て宗教が馬鹿気に見えること。
- 三、社会運動家が人格を重じないで凡てを物質的に見る癖のあること。

それで、私に云はすなら、反宗教の起るものなら、ウンと起つたが善いので、そんな波に破船するようなものであるならば、宗教として価値の無いものである。私等の宗教は生命宗教であるから、生命の続く間破壊されることが無い。そしてまた、社会主義者などが宗教を破壊出来ると思ふことも、馬鹿気たことで、彼等は余程近眼である。生命の破壊出来ない以上、生命宗教が破壊できるものか！ それは天に向つて唾を吐くようなものである。

然し、もし社会運動家が、宗教を無視するやうな態度に出るとするなら、その責任は大いに、宗教家にあるとせねばならぬ。その理由は、生命の愛護から出発すべき宗教が生命の愛護に出でずして、資本家階級の擁護に出てゐるからである。

私は宗教無視運動は迎ても、永続きするもので無いと思ふ。然し無視されるような宗教であるなら、無視されたが善いかも知れぬ。我等は無視し得ない大きな生命宗教を持てば善いのだ。

（トヨヒコ「五軒長屋より」、『雲の柱』第1巻第6号，1922年6月1日，68頁）

1922-8. 「第二章 人間線を越えて」

パウロは、たゞ数人を救へばいゝのだと云つた。ハドソン・テラーと云ふ人がある。彼は、支那伝道に一生を捧げたのであつたが、一生の間に、唯の一人だけの信者を得た。五十年かゝつて唯一人の信者！ 何といふ下手な伝道師だと人は云ふかも知れぬ。然し、彼は、其間に百年の大事業の基礎を支那に、据えたのである。私は一九二〇年、上海へ行つた。そして、テラーに基する、チャイナ・インランドミツシヨンの盛んな伝道事業を見たのであつた。

（賀川豊彦『人間として見たる使徒パウロ』警醒社，1922年8月3日，93頁）

1922-9. 「イエスと人類の更改」

……兵卒に対するヨハネの忠告は、此儘、そつくり今日の支那の軍人達に当る所の警告である。實際、私は、支那を漢口から北京へ旅行してみても驚いたのであつた。支那軍隊に対する給料が、少ない上に、其支払も渋り勝ちなので、すぐ暴動を起したり、民家を掠奪したりするのである。そして馬賊的軍人が、意気揚々として威張つてゐるのである。

若し、今日、洗礼者ヨハネの言葉を—イエスの言葉で無くても—此儘、実行するなら、確に世界は一変するであらう。

……私は、上海の貧民窟を歩いてみた一其処でな纏足した婦人たちが、危なげに、足の甲で歩いてゐた余程、可笑しな、又悲惨なものである。サアベル、勲章、爆弾の投合一も、或は、纏足に類する悲惨な滑稽ではなからうか？

遊廓の存在だつて、同じことである。墮落した人々にとっては、当り前のことであるかも知れぬ。賭博でも、打つ人々から考へれば、普通のことであるかも知れぬ。支那の広東では、政府が、賭博税を収納してゐる。即ち、所謂、テラ錢を其処では政府に収めれば、堂々と賭博が出来るわけである。

自分ぎめの物尺の外、批判の標準を持たない間凡ての人々は、墮落の渦中に在りながらも、少しも墮落してゐない積りでゐる。

神戸の市中に遊廓が設けられてゐる。誰が之に対して反対の声を挙げるか？

それが罪であると知つてゐて、若し、反対の叫を挙げないとすれば、挙げないだけ、それだけ罪を犯してゐるのである。

凡ての人が、悔改めて、総立ちになつて、此神戸市から、一或は、日本の国から、不潔なものを全滅、消滅せしめるのでなくてはならぬ。

資本主義、軍国主義、凡ての悪に対して、我々は拒否するだけの勇気がなくてはならぬ。

(『雲の柱』第1巻第10号、1922年10月1日、21～22頁、27頁)

【1923年】

1923-1. 「第三章 イエスの孤独と群衆」

不思議なことに基督教が異邦人へ割合に早く宣伝さるゝことの出来たのは此のシナゴグの力であつた。各地に会堂があつたので、此会堂に人々を集めてイエスの生涯を物語つたものであつた。

日本人は其反対に新聞がないと社会の出来事は仲々伝はらない。貧民窟などでは、それはつたわるのがはやい、六人殺が神戸であつたと云ふと、微に入り細にわたつて四方に報ぜられる。

……

所が支那では又反対で、茶館と云ふものがあつて、朝の六時から三錢出して茶を飲みに来る。三錢で三時間位も話してゆくのであるが、其間に色んなことが話されて、ついに社会運動になつて来る。で確に支那では新聞がなくても容易に社会運動を起すことが出来るであらふ。

(賀川豊彦『イエスと人類愛の内容』警醒社、1923年5月24日、90～91頁)

1923-2. 「第二章 イエスの譬喩の研究」

ヘーゲルの歴史哲学の中に、昔支那では天子は一人しかゐなかつた。所がイエスのやうな大工が、神の子となつたと云ふ事実があつてから、凡てのものが神の子の自覚に入つたと言つてゐる。

……

今日も支那では、北京には天壇と云ふ大理石で築いた大きな祈禱台がある。其所で正月の何日かに、天子が天に祈を捧げた。其所では天子だけが祭司になれるのである。

が私共には祭司がいない。私の五尺の身体の中に、神を宿してゐる。私の中に神が實際住み給ふのである。それで私共には恐がない。自然を見ても、人を見ても其所に、うまい法悦の世界が、のぞいてゐるばかりだ。

（賀川豊彦『イエスと自然の黙示』 警醒社，1923年6月23日，91頁）

【1924年】

1924-1. 「救貧策の前途」

社会的貧民は、各種の原因から発生します。或者は政治的原因から、或者は社会的風習そのものから或者は教育の程度の悪い為に、或者は軍事的行動即ち戦争が^{ママ}ら来ます。けれども我々に最も大きな影響を持つて居るのは即ち今日の経済組織そのものであります。私共は政治の悪い為に貧乏人の出来た例を沢山知つてをります。……経済政策の悪い為に貧民を作り、政治政策の間違つた為に貧民を作る。印度がそれであります。……或は朝鮮の貧乏、支那の貧乏と云ふものも、私はそれだと考へてをります。

（『日本弁護士協会録事』第28巻第5号，1924年5月28日，22～23頁）

1924-2. 『地球を墳墓として』

本所の住み心地

……私は樹木から云へば、関東が大好きで、関西は文明が古い関係か、大樹は殆ど山の中や神社の境内にあるものゝ外は、凡て切り倒してある。関東に来ると、あちらこちらに二百年三百年を数へる樟や、椋や、榛があるので実にうれしい。支那に行くとその感じが実に深い。上海から漢口に、漢口から北京に、北京から天津に、天津から満洲にと、私はクルクル廻つて見たが、結局禿げたゝれた支那をみたに過ぎなかつた。関西は支那のやうにならうとして居る。その点では、関東はまだまだ望みがある。ところが今度は大災害の為に、本所の木と云ふ木が丸で焼けて了つた。その為にどれだけか本所の人々が淋しいだらうと思つてゐる。

（『地球を墳墓として』アテネ書院，1924年6月21日，416～417頁）

1924-3. 『死線を越えて 下巻 壁の声きく時』

六十四

この混乱を後にして、新見栄一は支那上海の基督教青年会の乞ひに応じて、夏期大学の講演に出掛けた。

彼は、日本文化の淵源をなす支那大陸を見たかつた。それで、喜び勇んで出発した。

上海の街には少しも感心しなかつた。そこは、白人の造つた地上の地獄であつた。仏蘭西租界では孫逸仙に会つた。彼が死んだ桂をあまり賞めるので、彼もまた耄碌をしたと思つてすぐ別れた。過激派の陳独秀に会つた。陳は初めから終まで彼にも物を云はなかつた。

彼は五晩の講演を副業として、毎日上海の貧民窟を調査して廻つた。上海の運河と云ふ運河は、凡て湖北省の大洪水から逃げて来た罹災民で一杯になつてゐた。その数万と彼は推測した。彼等は舟を陸に引上げて、舟の中で寝て居た。舟が腐ると、蒲鉾形になつたアンペラ屋根の下に這入つて寝る。冬と伝染病の日が察せられる。

幾千となくアンペラ葺きの蒲鉾屋根の続く貧民窟の真中に、黒山になつて人だかりがある。近づいて見ると、賭博をしてゐるのだ。賭博—賭博—賭博—支那の貧民窟を廻つて新見の得た印象はたゞ、アンペラの蒲鉾屋根と賭博だけであつた。貧民窟の傍に大きな白壁の工場が立つ。それ

は日本人の経営して居る紡績会社である。そこには六才から十二三才迄の幼年工が幾百人となく労働してゐる。顔色は青ざめ、皮膚には艶がない。それで居て、日給僅かに支那銅貨で八錢だと云ふから非道い。

四馬路に茶館が立ち並ぶ。そこには支那の淫売婦が美装して客を引く。愛くるしい玉枝のやうな顔をしてゐるものもあれば、さかえさんのやうな顔をした小娘も居た。盆引も居れば、牛太郎も居る。日本の貧民窟の淫売婦と少しも変らない。

一支那まで来て、淫売婦を研究しなくとも善い。支那には、孔子も居つた筈だし、孟子も居つた筈が一更に自分を高く上に引き挙げてくれ、東洋の真理を教へてくれる人もないかなと町を彷徨したが、そこには利殖をあさるコンプラドール商人の外誰れにも会はなかつた。

彼は眼を人間より自然に移して、支那大陸そのものゝ声を聴かんとした。

長江は銀河のやうに、大平原の中央に横たわる。見渡す限り茫漠たる大平野である。そこには視線を遮る何の障害物もない。曇り日のこととて南京の街は蔭つて見える。雲のとぎれ目から洩れる太陽の光線に長江の上流は、鏡の如く光る。

南京雨花台から見た揚子江の美しさ！

新見は、東洋に帰つて来て、また再び大地の懐に帰つたやうな気がした。秦淮の宴が何であらう。上海四馬路の妓女が何であらう。新見は南京雨花台の風光に支那本来の面目を発見したやうに思ふた。

揚子江が天空より出で、大空に没する。そこには、烟筒もなければ、森林もない、見る限り、一平面に律せられたる自然の厳肅さがある。この平原から、東洋の文化が産れ、こゝに弘法大師が法を求め、孔子が仁義を説いたと思へば、故郷にも帰つたやうな思ひがする。南京の樓門は崩れ、架橋は曲み、文化は凡て地を払ふてゐるけれども、猶そこに雄大な山河が残つてゐる。見る人から見れば、それは少しも美術的ではない。そこには日光の美もなく、嚴島の優もない。然し新見の眼から見れば、揚子江には地球が肋骨を見せてゐる。

人類の廢頹と、引続く戦乱に、支那全土に生色は無いけれども、変らざる天恵は揚子江に湛えられてゐる。その黄色の水が少しも美しさに邪魔にならない。それが如何にも真正直な自然本来の性質の如く見える。その水面に太陽が反射すると、澄める水と濁れる水に何の差もない。雨花台にはそれが見える。

南京の街の醜い陋屋も、遠くから見れば少しも悪感を与へない。心持ち跳ね上つた瓦屋根が、一直線に引かれた地平線と相配合して、何とも云へぬ美しさを持つ。日本のやうに山も川も、大きな曲線を持つところでは、その歪みが、如何にもわざとらしいが、支那に来て初めてそれが美しく見える。

南京の中央に立つ真赤に塗つた金門が、如何にも四圍の山河にうつりが善く見える。十幾里か打続く、明の旧都の城壁はセピア色して、なだらかな勾配を持つた丘々は言葉で云ひ現すことの出来ない美しさを持つ！

「支那人は大きな国民だ！」と新見はつくづく感心する。

南京に明の文化を尋ねて失敗に了つた彼も雨花台の大自然には溶かされた。雨がぼつ [ぼつ] 降つて来た。そして、花の如く美しい小石が心持ち湿つた丘陵の斜面に、或はルビーの色をして、

或はエメラルドの色をして落ちてゐる。南京の貧しい子供等が、その小石を拾つて二十個一銭に売つて居る。親切にその一つを買ひ取つて、子供の頭の上に手を按くと、児供は天使のやうな顔をして微笑む。自然と児供に国の東西は無い。

ブツクリ [ブツクリ] 揚子江に屍が流れて行く一裸体のまゝ、腐り果て、青錆が附いて居る。水の流るゝまゝに、小波に揺られて川下に漂ふて行く。

屍の側に小さい帆船が走る。屍を拾ひ上げやうともせず、無関心で、走り去つた。

『夏は、毎航海、二つか、三つか、必度、土左衛門に遭ひます……支那人は存外それは無頓着なものです—』

二等運転士が 平気で新見に、さう教へた。

屍は下に、下に、流れて行く。広い、毒々しい、黄ろい流は静かに流れてゐる。妖怪のやうに一。

鎮江、九江と船のつく所々に新見は全く感心して了つた。そこには、アメリカで見るやうな新しい都会は一つもなかつた。幾千年来、住み古した旧い文化が、或は傾いた宝塔に、或は茶褐色を帯びた城壁に残つてゐるだけであつた。然し、悠々と流れる長江を臨んで、それ等のものは凡て物思ひに沈んで居るやうである。それはみな生物のやうに過去を記憶する彼等は、長髪賊の元首洪秀全を見たと云ひ、関羽、張飛をも知つてゐると云ふ。赤壁に来ては、そこに英雄の涙を吸ひ込んだ山河が残つてゐる。支那の自然は、荒廃してゐても、多情多感である。

筏船が下つてくる。その一つが、一哩も、二哩も続き、筏の上に土を盛り、畑を作つてゐる。畑には今を盛りと野菜が生え繁る。そこには葱も、芋も、豆も牛蒡も植つてゐる。それが四五反もあるであらう。小屋が一つの筏の上に二十七軒もあるものがある。

それが波も立てないで浮洲のやうに河下に降つて行く一陸地が流れてゐるのぢやないかと思はれる。

新見は色々と想像をしてみる—

「春には、そこに菜種の花も咲かう、秋には鶏頭の花も。そこには勿論、恋もあれば、妬みもある。そして、筏の上に出産するものもあれば、墓の立てられるものもあるであらう—四川省を發して、上海に出るまで四年、五年と経つ間に独立政府の二つ三つが建てられてまた倒されてゐる。黄興も死に、孫逸仙が旗を巻いて逃げ出してもゐるだらう。それでも長江に浮ぶ筏は昔変らぬ濁流に棹さして、悠然と江を降るのだ。

それだから支那人は豪い！」

また幅一里もあらうと思はれる長江に、家鴨を千羽、二千羽と放し飼ひにして、長良川で鶺鴒飼ひする調子で河上から、河下に逐ふて行くものがある。家鴨は葦の繁る岸辺に餌をあさつて、逐はるゝ儘に一日に一里二里と、静かな長江の流れに沿ふて、川下に流れ下る。そして一日餌を拾へば、一日だけ肥る。ヨルダン河の洗礼者ヨハネのやうな服装をした家鴨飼ひが、扁舟を江に浮べ、その拙ない竿で、家鴨を川下に逐ひたて乍ら、自分も川下に舟を押し流して行く。少しも無理が無い。水が流れば舟も流れる。舟も流れれば、家鴨も流れる。その間に家鴨は自然と大きくなつて、九江から南京まで汽船で行くと僅か一昼夜で行けるところを九十日もかゝつて流れると、早や家鴨は大きくなつて、籬で出た鳥が一貫も一貫五百目にもなつてゐる。それを一羽も残さず

市場に叩き売つて、帰りは汽船の四等船客となつて、上流に帰つてくる。そして、また江に浮ぶ家鴨と生活を共にして、河下に降る。

—江上の遊牧民！

新見はその閑雅な風光を眺めて、平和なその人達を祝福した。

—あゝして居つても、一生は送れるのだ。自然は人間を見捨てはしない！

水の流れと共に、自然の流れの趨くが儘に敢て遮るものもなく、たゞ悠々として、みこゝろの儘に托せて居れば、何日かは地を嗣ぐものとなるのだ—

新見は揚子江の家鴨飼になりたかつた。

第一革命の発祥地である漢口も武昌も、新見を少しも感動させなかつた。漢口の揚子江造船所で馮玉祥に会つた。馮玉祥はこんなことを云つた。

『おまへの国では××があるから物価が高いのだ、俺の居る河南では卵一つがお前の国の百四十四分の一で買へる。これは×××だからだ』

彼はまるで、揚子江の家鴨飼の云ふやうなことを云ふてゐた。

揚子江に赤旗を立て、そこを通行する船から通行税を搾り取つてゐるのは、こんな人達だと思ふ。

水の涸れた平原に、砂烟が立つ—何百里か、何千里か—

たゞ茫漠たる平原を一寸の隙だに粗かにせず、根気よく耕した。その労力の貴さ—安さ！ 野驢馬が、汽車に吃驚して、走り廻る、牧羊者が佇む。黄ろい平野に黄ろい顔して、汚衣蓬髪を氣にもせず、列車に群がる、放浪者—乞食—苦力の大群が、無蓋車に乗せられた儘、名も知らぬ大平原の淋しい停車場に捨てられてある。

黍は一寸しかはえ上らず、稗は五寸しか延びないで、人間の努力に裏切る、今年の飢饉—土塀は崩れ、城壁は破れ、山も河も凡て疲れてゐる—

黄く光る、黄河の顔—

すぐ思ひ出す、支那人の黄ろい顔、そして黄ろい太陽が、黄ろい埃の立つ河南の平原を射る！ 汽車は駅々に止つて、無闇に客車を占領したがる兵士の群の灰色の姿が、徒に蠢めいてゐる—徐樹錚が逃げたが、まだもう一遍内乱があるかな—さう、客車の中で、小さくなつて新見は考へた。

汽車は烟を吐いて、河南の平原を韋駄天の如く走る—謎のやうに、夢のやうに。

河南の南部では家のない野原に人間が労働してゐる。人はみな穴居してゐる。一直線に敷設した京漢線は両側に楊を植えてゐる。それが平原に残つた唯一の木である。早魃が続いて収穫が近いのに高粱が五寸位しか延びて居ない。直隸省に這入ると、食物を抛げて貫はふとステーション、ステーションに幾十の飢民が列車に群がつてくる。

洛陽の文化も今は凋み、見渡す限りの曠野に一本の青木も立つてゐない。ステーションに近く赤土で塗つた城壁に、今にも崩れ落ちさうな城門の附いた小都会が立つてゐる。中原の鹿は何処を飛んで居るのかは知らないが、中華の文化も今や全く頽れ、町々は放棄せられ、その城門を修

理するものもないらしい。すぐイエスの句が思ひ出される—

—あ、禍なる哉コラジンよ、
 噫、禍なる哉ベテサイダよ！
 —既に天にまで挙げられしカペナウムよ！
 又陰府に落さるべし
 汝等の中に行し異能を
 もしソドムに行し、ならば
 今日までも尚保ちしならん—

孔子も、孟子も、支那を救ふ力とはならなかつた。老子も、墨子も、あの太史公を漢訳した支那佛教も支那四億の道徳的勢力とならないで、私欲に充ちた督軍が、今や国民を喰ひ物にし、列強は競ふて、支那を分割せんとしてゐる、悲しいのは日本政府の二十一ヶ条の要求である。今日ではそれも一個の空文にしか過ぎないが、その帝國主義的な色彩に支那全土が憤慨してゐる。

そして東洋に仁義亡び、空しく山河がそこに残る。

北京はいやな市であつた。新見に訴へるものは何にもなかつた。喇嘛教の生殖器崇拜を許容するだけ、墮落した街である、

彼は城壁の中に、城壁を作つた個人主義的な都市がいやになつた。アメリカ式の大学がいやであつた。然し考へてみればアメリカと支那には大なる共通点がある。

孔子の廟に行つて、そこに黎元洪の「大同」の扁額を見たが、共和の支那が、孔子の道徳哲学を改纂するのに苦心してゐるのを見た。それは余りに小さい努力である。扁額一枚を取り換へて国民の精気を更改し得ると思ふほど、安価な努力である。

新見は、支那の元首に代つて、大理石の天壇で祈つた。

—揚子江の水を漲らしめ、黄河に水を湛え給ふ天主、慈悲の父、全能者よ、支那を憫み、支那四億の民を力づけさせ給へ、内に私欲を去り、外に仁義を守り、光明もて、導かせ給へ、御神！昔、孔子を興し、墨子をもて愛を説き給ひし光なる天主、願はくは、今日支那に幾多の孔子と墨子を興し給へ、仁の外に道なく、義の外に統治者なきを示し給へ、やがて此国にも十字架の輝き眩く、地に聖愛を植え給へ—アーメン

天津には四千の飢民が群つてゐた。煤竹を組み合わせたやうな瘠せ衰へた骨格をして、街に乞食に出て居る哀れば人々が立つてゐた。新見は涙なしに、それを見る事が出来なかつた。彼は直に総領事を案内して、その飢民の群を見せ、日本に打電して、救済の方法を取つた。

六十五

天津から、彼は満洲を廻つて、朝鮮に下つた。山海関を越へて、万里の長城を後に見ると天地が變つたやうな心持ちがした。家は小さくなり、山河の荒れた姿が甚しくなる。奉天に近づくと共に、蒙古の砂塵が明瞭見える。北の空は、いつも大都市の空を見るやうに濁つてゐる。何となく物凄しい。

朝鮮に這入ると、乞食の国に來たやうな気がする。京城に這入つても何だか少しも落ち付いた気がしない。日本人は日本人で一所に集つてゐる。朝鮮人は朝鮮人で別になつてゐる。兩人種の間にある征服被征服の關係が明かに見える。京城の貧しい家を見て廻る。腰をかゞめなければ這

入れないやうな低い家でもきちんと生活してゐる。何となく奥床しい。支那の貧民窟などとは全く趣きが違ふ。如何にも教養ある国民のやうに感ぜられる。朝鮮人に対する尊敬の度が高まる。釜山から門司に渡ると、山奥から大都会に出て来たやうな気がする。凡てが便利で、きちんとして居る。その変りこせ [こせ] して狭苦しい。米国から帰つて来た時と同じやうに満鮮から帰つても日本の島島に人口の多いことは、すぐ気が附く。

神戸の貧民窟に帰ると、上杉が新見の顔を見るなり、待つてゐましたとばかり酒代をねだる。支那から帰つて、新見栄一には、静かな半年が続いた。……

(賀川豊彦『死線を越えて 下巻 壁の声きく時』改造社, 1924年12月3日, 419~431頁)

1924 - 4. 「防貧策の科学的基礎—大正十三年三月十五日 於貴族院議員午餐会—」

……幸にして日本の国には沙漠の地帯にかゝつて居る部分が少ないものでありますから、多少安心が出来ますけれども、若しも支那の西域の地方のやうに益々乾いて段々広がつて行くやうな地方があるとすれば大きな問題であります。支那に於きましても、印度に於きましても、大抵十年目位に一度大きな飢饉があります。大正九年でございました、私が支那の飢饉の地方を視察いたしまして、あの直隸州の各地方から出て参ります飢民が沢山集まつて参りました状態を見まして、実際あれが日本で起るならばどうであらうかと思つて身震ひした次第であります。支那の貧困の如きは殆ど自然的の原因が多いのでありまして、まだ社会的の原因と云ふものはさう多くはございません。日本の貧困と云ふものは、段々斯う云つたものが大都市に出来て参りますと共に減少しつゝありますが、まだ自然的原因から来る貧困が多いのであります。村で貧乏して町の方へ流れ込んで来ると云ふものが正当な見方をする者にとつては、気付かれる点でございます。……

(大日本雄弁会編『賀川豊彦氏大講演会』大日本雄弁会, 1926年4月5日, 225~226頁)

【1925年】

1925 - 1. 「二重の檻を毀て—大正十四年十二月十四日 於婦女売買禁止問題講演会—」

私は本年五月十九日、ベルリンから国際労働会議に望む為めに、巴里の日本大使館で杉村廣太郎氏を訪れた。談はたま [たま] 婦女禁売買問題に及んだ。杉村氏の云はるゝには、今度の国際会議には我々は受身だから弱つて居る。阿片問題の時は日本は攻勢で英国をさん [ざん] やつた。実際シンガポール、ホンコン、コロボなどにある政庁の収入の大部分は阿片による儲で、その額は一ヶ所で一ヶ年七千万円もあると云はれて居る。英国は口に人道を称へながら、これを止め得ないと云ふことがあるかと云ふので、支那と日本とは共同して、この問題が為めに英国を責めた。その時の英国側の委員はロバート・セシルと云ふ立派な人格者であつたが、日支両国の鋭鋒に弱つてしまつて、とう [とう] 退いた。……

……それ計りではない。支那朝鮮へ娼妓制度を教へたのは日本である。それ故東洋諸国はこぞつて日本を恨んで居る。ジョン・パリスの書いた『きもの』の中にも吉原の事が書いてある。武士、富士、吉原は日本の代表となつて居る。

(大日本雄弁会編『賀川豊彦氏大講演集』大日本雄弁会, 1926年4月5日, 348~349頁, 356頁)

—了—

註

- 1) 拙稿『「中外日報」に連載された賀川豊彦の署名記事をめぐって』(『雲の柱』第36号, 賀川豊彦記念松沢資料館, 2022年刊行予定) に詳しく整理した。
- 2) 拙稿「賀川豊彦の第一回中国訪問について—1920年夏の〈原体験〉を思考する」(『賀川豊彦学会論叢』第29号, 2022年刊行予定) で考察した。
- 3) 拙稿「中国における賀川豊彦評価をめぐって」(『立命館経済学』第65巻第6号, 2017年) を参照されたい。

附 図



第一回訪中からの帰国直後に『中外日報』で速報された印象記。百年余り知られていなかったのは、同紙が仏教系だったためだろうか。

附記：本稿は公益財団法人 JFE21世紀財団アジア歴史研究助成による成果の一部である。